

あとがき 拓ける民族植物学の可能性

木俣美樹男

長らく構想していた『民族植物学ノオト』第1号を発行することができてとてもうれしく思っています。この雑誌は東京学芸大学環境教育実践施設の民族植物学研究室卒業生で任意に創った「民族植物智の会」で発行します。発行前年度の卒業論文や修士論文の概要のほか、学会誌に投稿はしませんが記録にとどめるべき調査研究の成果などを掲載していきます。

日本で民族植物学の講義を最初にしたのは龍谷大学国際文化学部の阪本寧男先生とのことです。弟子である著者はそれに負けじと、2000年から東京学芸大学で開講しました。老師に続いて日本で2番目ということです。C.M.コットン(2002)『民族植物学—理論と応用』八坂書房刊行(2004)も本研究室で翻訳しました。現在はこの教科書を用いて、学部1年で「民族植物学」と大学院で「環境民族植物学」として講義科目を提供しています。

うれしいことに、昨年(2004)からは国立民族学博物館の山本紀夫先生を代表者にして、民族植物学の共同研究会が3年計画で開始されました。年3から4回の研究会に毎回30名ほどの、すば

らしい調査研究の実績を有した方々が参加されています。著者も共同研究員として末席に連なっています。この研究会の成果はいずれ書籍にまとめられ、日本でも民族植物学が広く認知される契機となるでしょう。

東京学芸大学は日本における環境教育学の発祥の地であり、その基礎学である民族植物学を最も早くから講義に取り上げた誇りを大切にしたいと思います。雑穀研究や農山村エコミュージアムが主な研究素材としても、環境教育学の研究方法論は民族植物学から多くを得ていると考えています。

イギリスのケント大学と王立キュー植物園は共同して大学院修士課程民族植物学コースを運営しています。一時ではありますが、著者も客員教授としてこの地でともに学びます。さらに民族植物学への理解を深め、卒業生や在校生の皆様はその成果をお伝えできることを楽しみにしています。このことが日本の環境教育学の基盤を強化することにつながると確信してもいます。

(2005. 7. 7)

民族植物学ノオト 第1号

Ethnobotanical Notes No.1 in collaboration with plants

2005年7月7日 印刷

2005年7月23日 発行

編集者 木俣美樹男

発行所 東京学芸大学環境教育実践施設 民族植物学研究室
〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

<http://www.fsifee.u-gakugei.ac.jp/millets/>

kimatami@u-gakugei.ac.jp

電話 042-329-7666 ; fax 042-329-7669

印刷所 有限会社 サンプロセス

東京都東大和市新堀1-1435-29